再臨のキリストによる
第５福音書
ヘイマルメネー
―星辰的宿命と神話の現実化―
THE GOSPEL
BY CHRIST OF
THE SECOND COMING
No.5
Ⅳ
HEYMALMENEE
SEIDOU
正道

目次

第２部　ディオニュソスの代理人（ 続き ）
第５福音書 3
全体の目次 4

第 13 章　太陽を脱ぐ女
（ １ ）神の業に届かない限界性 9
（ ２ ）太陽を脱ぐに至るまで 13

第 14 章　別ルートによる虚無への降下
（ １ ）誤解を避けるために 21
（ ２ ）外向型の病理 24

第 15 章　終曲　求めあう光と影
（ １ ）イエス・キリストの時代 29
（ ２ ）福音書記家の時代 33
（ ３ ）黙示録が書かれた時代 36
（ ４ ）宗教改革の時代 38
（ ５ ）日本におけるキリスト教公認の時代 40

第３部　イースターを巡る物語
第５福音書 45
全体の目次 46

第 16 章　聖母の出現
（ １ ）時を遡って 51
（ ２ ）聖母被昇天教義 53

第 17 章　復活
（ １ ）イースターについての考察 59
（ ２ ）運命の糸を手繰る 62

第２部　ディオニュソスの代理人（続き）

第５福音書

再臨のキリストによる
第五福音書

ヘイマルメネー
――星辰的宿命と神話の現実化

公現祭（エピファニー）あたる一月六日は、そもそもディオニューソスをたたえる古代ギリシアの祝日でもあった。

池上英洋『死と復活』より

全体の目次

序　立ち昇る神話

第1部 イエスとディオニュソス

第1章 イエスの影
第2章 イエスとディオニュソスの相似点
第3章 生命と死と甦り
第4章 ディオニュソスの発見者
第5章 アポロン的なものについて
第6章 ディオニュソス的なものについて
第7章 ニーチェの謂い、ユングの謂い

第2部 ディオニュソスの代理人

第8章 語り出す黙示録
第9章 対話劇　バッコスの結婚
第10章 男性原理まで逸脱した女性
第11章 王座に引き上げられた子供
第12章 黙示録の時代としての現代
第13章 太陽を脱ぐ女
第14章 別ルートによる虚無への降下
第15章 終曲　求めあう光と影

第3部 イースターをめぐる物語

第16章　聖母の出現
第17章　復活

第 13 章　太陽を脱ぐ女

（１）神の業に届かない限界性

太陽を脱いだ陽子

すでに論じた主題ではあるが、ここで同じ内容を繰り返したい。
『ヨハネの黙示録』の第十二章に登場する女性は、「太陽を着た女」とは呼ばれても、決して「太陽の女」と呼ばれることはない。

その理由は次のようなものだろう。

すなわち「太陽」は、彼女にとって、衣服のように着脱可能なものだった。また、いつまでも、それを着ていられるものでもなかった、という。

そう、太陽は彼女にとって、自身の皮膚でもなければ、自身の肉でもなかった。それは飽くまでも「服」だったのだ。そして着ている服は、いつかは脱がなければならない。

これがアリアドネだったなら、彼女を恒常的に「太陽の女」と呼び得たかもしれない。たとえ――陽子と同様に――彼女の太陽が服だったとしても、彼女は死ぬまで、その「太陽」を脱がずに済んだかもしれない。

なぜなら、彼女の堕胎は、ディオニュソスという神の「神の御業」によるものだったからだ。

ために、そこでは傷も痛みも、さらには後悔までもが払拭されていた。だからアリアドネならば、いついつまでも、彼女の夫であるディオニュソスと、自身の心を重ねていられたことだろう。

だが陽子の場合は、残念ながらそういう訳にはいかなかった。彼女の堕胎は、しょせんは「人間がこしらえた科学技術」による施術だからである。

結局それは人の業によるものであり、神の御業には届かない「人類としての限界性」に縛られていた。

神の前には小さき人間

要するにそれは、傷や痛みや後悔を「全面的には」拭い去れない程度の施術だったのである。つまり人工中絶には、人間業というものの技能的限界性が伴っていたわけだ。

そして、かような限界性を見るとき、私には、よく思い出される文言がある。

人間は「知恵の実」を食い、楽園を追われ、機械を用いて神々に等しきものとなった。（ 中略 ）だがその下界の荒野に一人立ったとき「私は虫であって、人ではない」という詩篇の言葉が思い出される。

山本七平『聖書の旅』より

文中の「機械を用いて」は「科学技術により」と言い換えることが可能だろう。つまり次のようにだ。

人間は「知恵の実」を食い、楽園を追われ、科学技術により神々に等しきものとなった。
だがその下界の荒野に一人立ったとき「私は虫であって、人ではない」という詩篇の言葉が思い出される。

そのうえで言うのだが、私もまた、山本氏と全く同じように思う。どんなに思い上がっても、実際の私たちは、どこかしらで、虫けらのように小さいところがあるのだ。
そういえば『創世記』に、バベルの塔という話がある。これは、人知を結集して建設中だった高塔が、神の巧知によって中途放棄されるまでの話である。
この有名なエピソードが言わんとしていることもまた「人知によって、どれほど科学技術を高めていっても、所詮それが天の領域まで届くことはない」という事なのだろうと思う。
事実そうなのだ。私たち人間には、そのように「どうしても認めざるを得ない、厳然たる限界性」がある。いかなる時でも私たちは、そのことを、ゆめゆめ忘れてはなるまい。

嬰児殺しと胎児殺し

とはいっても、現代の人工中絶手術は、極度に洗練された科学技術ではある。
比較考量のため、中世を舞台にした、ゲーテの『ファウスト』を見てみよう。
そこには「いったん子供を産んでから、その子供を殺す」という「嬰児殺し」の場面がある。

嬰児とは、生まれたばかりの赤ん坊のことだ。したがって、これを殺すとなれば、そのシチュエーションは、現実的な殺人現場にしかならない。

かかる嬰児殺しと比べたら、現代の人工中絶手術は、まるで魔法のようにエレガントなものだ。

人工中絶の手術は、傷も痛みも後悔も、母体の心身の「浅いところ」までしか影響を与えはしない。

なにしろ母親が麻酔で眠っている間に、その施術の全てが終わってしまっているのだからである。母親は、自分が堕した子供の顔すら見ないで済むのだ。

であるからこそ、ここで改めて言っておこう。純粋な事実として直視すれば、中絶は、明らかに「人を殺すこと」である。

しかし、極度の技術的洗練によって、中絶手術は、かかる行為が「殺人であること」を大部分隠してくれる。

他方『ファウスト』のヒロインであるグレートヒェンは、立派な人殺しの一種である「嬰児殺し」の罪悪感により、子供という存在に、終生つながれ続けた。

そして、この罪悪感の結果として、グレートヒェンは、その心を、虚無の領域まで下降させることが出来なかった。

換言すれば彼女は、その生涯の終わりまで、母子の二者関係（ 子供への愛 ）に留まってしまったのだ。

そのため彼女は、自分自身が「誰でもないほどの一人称」あるいは「〇人称」とならなければ至れない「虚無の座標」まで降りることが出来なかったのである。

グレートヒェンの母性愛

あらためて考えてみよう。

本質的に言えば、嬰児殺しも胎児殺しも「殺人として同一のもの」である。

しかし人工中絶の場合は、その技術的洗練により、これが殺人である事実も、そうした行為（ 中絶 ）があった事実も、母親にとって、なかば忘れていられるものとなる。

他方、この点において、嬰児殺しは全く異なるものとなってしまう。

すなわち、それをすると母親は、むしろ「愛する我が子を失うかたちでの」流産のときのような、執着的な心理状況に陥ってしまうのだ。

すなわち、本書第九章の『バッコスの婚礼』において、ディオニュソスが、
「流産の場合は『愛』が『痛みと傷』に置き換わっただけなのだ。使われた糊の種類が何であれ、糊は糊の役割を果たす。

そして、その糊によって、母と子は、たしかに固く結ばれてしまう」

と言ったように。

さらに厳密に言うと、嬰児殺しの場合は「子殺しの罪悪感」が、愛の代わりに、母と

子を結びつけるとも言えるだろう。

　このことを証明するかのように、くだんの「罪悪感により狂ったグレートヒェン」は、夫ファウストに向かって、次のように自身の思いを語る。

「赤ちゃんは、私が水に沈めましたの。でも私が刑死したら、赤ちゃんはわたしの胸のところに埋めて、ほかには誰もわたしのそばに寄せないでね」

　このグレートヒェンの言葉はすごい。彼女の罪悪感と愛情とが混ざりあって、怒涛のようにこちらへ押し寄せてくる。まったく、読んでいるほうが胸苦しくなる。

　それはまことに悲しい台詞だが、確かなのは、これも一つの「母性愛のかたち」だということだ。そのようにグレートヒェンは、我が子を殺した母親として、底なしに苦しんだ。

　それでも、結果的にはグレートヒェンの魂は、霊的に救われることになる。

　それは一つには『ファウスト』の舞台が、キリスト教の倫理観が深く根付いていた時代（ 中世 ）だったからだ。

　グレートヒェンは、罪悪感によって砕かれた己が魂を、ただ一途に聖母マリアに捧げた。マリアに向かって、おのが魂の救いを、祈りに祈った。

　そうして彼女は、死後に聖母マリアの眷属となり「永遠に女性的なるもの」へと高められた（ ＝救われた ）のである。

（２）太陽を脱ぐに至るまで

救われない時代の陽子

これに対して陽子は「誰でもやっている」堕胎手術によって、ほとんど罪の意識もないままに、胎児の命を抹殺することが出来た。

そうすることで彼女は、虚無の領域まで下降することも出来た。

そこで働いていたのは、罪悪感を隠してくれる「エレガントな中絶手術」による心理効果（技術面）だけではない。

陽子のような外向型（次章参照）にとって、「誰でもやっていること」は、純正なる正当行為になり得る（倫理面）。このことが更に、陽子の罪悪感を取り除いてくれたのだ。

事実、人工中絶の手術の件数は、現代日本ならば、年間で十六万件にも登る。これはまさに「誰でもやっていること」の内に入る事柄だろう。

それに、黙示録の時代である現代には、生きた宗教的倫理も、生きた神の姿も、全くと言っていいほど見られない。この点でも、中世のキリスト教社会とは全く異なっている。

つまり現代には、陽子の行動を咎めるものなど、何一つなかったのである。

もっとも、唯一彼女の中絶を止めようとしたのが私だった。

しかし陽子にとって、私の言葉など、しょせん夢想家のたわごとでしかなかった。ゆえに、私の言葉が彼女の「胎児殺し」を止める動因となることは、ただの一度たりとも無かったのである。

かくして陽子は、堕胎によって母子という二者関係を捨てた。愛を捨てることでディオニュソス的下降を続け、ついにウーティス（誰でもない者）となった。

ウーティスとして「私がいない」と感じた彼女は、そのとき虚無となった。つまり彼女は、そのとき太陽（虚無）を着たのである。

そうして「太陽を着た女」となった陽子は、私にルベドの真理を教えてくれた。彼女から虚無を受け取ることで、私は「虚無からの存在の創造」というヴィジョンを悟得した。

しかし、そうやって自分の役割を果たし終えた陽子は、いまや太陽という衣装を脱ぐことになった。

それは積極的な行為でもなければ、肯定的な行為でもない。単に彼女は、もはや虚無（＝太陽）の座標で、安穏としていることが出来なくなってしまったのだ。それだけの話である。

夢想が現実になるとき

どうしてそうなったのか。

それは陽子が、彼女の心をそのままトレースしたような、私からの手紙（ 詩 ）を読んだからである。彼女の悲しみをモーツアルトの音楽になぞらえた『アマデウス』という題名の詩がそれだ。

その詩によって陽子は、私の「リアリスト（ 現実主義者 ）としての本性」を見ることになった。私が、他のどんな人間よりも「現実」を見ていること知った。

皮肉にも、それまでの陽子は、私のことを「誰よりも遠く現実離れした、重症のファンタジスト（ 夢想家 ）」だと固く信じていた。

そのため、私たち二人の間に、次のような経緯が生じることになった。

あの中絶手術に至るまで、私は、陽子に対し、神が存在することや、霊の世界があることなどを、何度も何度も訴えていた。だから「中絶手術などしないでくれ」と。

しかし陽子にとって、神や霊の世界は、単なるファンタジーでしかなかった。およそ虚構としてしか感じられないものだった。

ゆえに、かかる「神と霊的世界の実在」を訴える私のこともまた、彼女は「現実離れしたファンタジスト」としか捉えられなかったのである。

ところが、私の『アマデウス』に書かれていたのは「見紛うことなき、現実としての陽子の心」だった。

観測者としての私の目は、透徹した分析力で、ありのままの「現実」を直視していた。観測対象という立場上、陽子には、背筋が凍るぐらいの確実度で、その現実性が痛感された。

そのため彼女は、こう確信せずにいられなかったのだ。

「私が誰にも言ったことがない内的現実をも、この手紙をくれた男の目は、寸分違わず見定めていたのだ」と。

そして、この透徹したリアリストが、一貫して語ってきたのが「神」や「霊的世界」だったのである。

そのため陽子は、突如として「神」や「霊的世界」に、それまで一度も感じたことがない「実在感」を覚えることになった。

よって、このとき陽子は、半ば確信めいて「神や霊的世界は、本当にあるのかもしれない」と思ったことだろう。

と同時に陽子は、私が、彼女の中絶手術を止めるために繰り返した「神の目から見たとき、堕胎は罪になる」という言葉にも、強く心を揺り動かされるようになった。

太陽を脱いで、月の領域に戻る

かくして陽子の世界観は一変した。彼女は突然「裁きの神が実在する世界」に、重罪人として、放り込まれたような気持ちになったのだ。

こうして陽子は、もはや太陽を脱がない訳にはいかなくなった。

それまでの陽子は、自身の罪を意識しないことによってこそ、太陽（ 虚無 ）を着ていられたのだから、である。

それなのに、ここにきて急に「虚無への下降手段たる『堕胎手術』が、どうやら罪にあたることらしい」という疑念が湧いてきてしまった。

すると、すでに堕胎を経験している陽子の心身に、一気に「罪人としての不安感」が流れ込むことになる。自分がそこ（ 虚無の領域 ）にいたことは、いけない事だったのかもしれない、と。

こうなれば、中絶手術の「洗練されたエレガンス」など形無しである。ある意味で、人間の科学力が、神の叡智に敗北した瞬間でもある。

今や陽子のなかで、バベルの塔が、音を立てて崩れてゆく。

かくして陽子は太陽（ 虚無 ）を脱ぐことになった。そうせざるを得なかった。

アリアドネのような「太陽の女」ではない彼女は、ついに、これまで身に着けていた「太陽の衣服」を脱ぐときを迎えたのだった。

そして、太陽を脱いで裸になった陽子の体（ 心 ）は、どう見ても、女性のそれでしかなかった。

太陽（ 虚無 ）の衣服は、彼女を半ば男性のように見せていたが、それを脱いでしまえば、もはや陽子は、女性以外の何者でもなかったのだ。

そのような陽子であればだ。いまや彼女は、速やかに「月～大地」の内側の領域へと立ち戻らざるを得なかった。

つまり彼女は、彼女にとって本来的な「女の領域」に立ち帰るしかなかったのである。

神によって守られる「女」

そのとき現れたのは、禁断の世界（ 虚無の座標 ）に足を踏み入れたことで、深く心身を傷つけることになった「重傷の女」だった。

むろん彼女から、太陽の輝きなどは、とっくに消え失せていた。

この、ほとんど惨めにも見えた陽子は、私たちの「運命的な舞台」から退場しつつあった。つまり私の視界から、静かに消えていこうとしていた。

一方その頃の私は「はたして陽子の脆弱な心が、私を離れて正気を保っていられるのだろうか」という形で彼女のことを心配していた。

しかし、そのように心配するのと同時に、陽子にとってみれば、私との関わり自体が「怪奇現象に遭遇したレベルでの苦痛であること」もまた理解できた。

とはいえ、根本のところでは『ヨハネの黙示録』の記述どおりに、陽子は、私から離れていくというのが「動かしえぬ運命」だったのだろう。そこには、こう書かれている。

女は荒れ野に逃げ込んだ。そこには、この女が千二百六十日の間養われるように、神の用意した場所があった。

その言葉どおりに、陽子は私の目の届かないところへと去っていった。そのため私は、陽子がその後、どのような人生を送ったか知らないでいた。

――ところが、ごく最近（二〇一八年）になって、私は陽子の姿を、この目で見ることになったのである。

それは私の娘（次女）がバレーボールの試合をするために「自分の学校ではない」小学校に訪れたときのことである。

その試合に同行していた私は、初めて入る体育館で、思いがけず陽子の姿に遭遇したのだった。

彼女は、娘が試合しているのとは別のコートで「ママさんバレー」の一員として走り回っていた。笑顔でレシーブをしていた。

二十年以上ぶりの再会であるが、私は陽子に声をかけたりはしなかった。ただ遠くから彼女を見ていた。それで充分だった。

神の保護期間

そもそも『ヨハネの黙示録』の記述にも、幾ばくかの慰めはあったのだ。

そこには――かつて太陽を着た女と呼ばれた――彼女に翼が与えられたり、大地が彼女を助ける、といった記述が見られるのであるから。

そして、もしそのように「大地が彼女を助ける」というならばだ。かかる「母なる大地」の保護下にあって、陽子は、自ら母親にさえなったかもしれない。

この点で私は、彼女が「ママさんバレー」の一員であったことを、ことさら肯定的に受け止めたいと考えている。

いずれにしても、私自身は「太陽を着た女」が、その悲しみによって産み落とした子供である。彼女の犠牲が、私をルベドの悟りへと導いてくれたからだ。

ルベディアンとしての私は、陽子の悲しみに、その誕生の起因を負っているのである。この点からすれば、陽子には感謝しかない。

第 14 章　別ルートによる虚無への降下

（１）誤解を避けるために

誤解の機縁をはらむ陽子の下降

本福音書の第６章において、私は「虚無への下降」の道程を紹介した。

すなわち「依代への自我の明け渡し―性的オルギア―音と踊りによる衝動化」という順序による「下降」である。そして、その行きつく先が「虚無」だった。

そして、つい先ほどまで考察の対象となっていた陽子こそは、まさに虚無の体現者だった。

となると、本書の読者のなかでは、以下のような「想定上のストーリー」が生じる可能性がある。すなわち、

「陽子はきっと、依代へ自我を明け渡し、性的オルギアを経て妊娠したのだろう。そのため堕胎手術を行い、アリアドネのように、ついに虚無に達した訳だ」という。

しかし、実態はそうではない。いや、正確に言えば「そうではないだろう」。

むろん私は、陽子のプライベートについては何も知らない。だから「そうではない」と断言することは出来ない。

しかし、少なくとも私は、実際に陽子と接したことがある人間である。

そして、そうした立場から言わせてもらえばだ。陽子が、上記のような過程を経て、虚無の領域に至った可能性は、限りなくゼロに近いように思われるのである。

ディオニュソス教とは異なる流儀

そもそも、人間が虚無に到達するためのルートは、かの「依代への自我の明け渡し―性的オルギア―音と踊りによる衝動化」だけではないのだ。

第６章で紹介したこの下降ルートは、あくまでもディオニュソス教徒の流儀によるものなのである。

しかし陽子は、ディオニュソス教徒ではない。だから陽子は、きっと彼女ならではのルートを通って、虚無の領域へと到達したはずなのだ。

そこで話は、本章のテーマとなる「陽子における、ディオニュソス教徒とは異なるルートによる虚無への下降」の推察となる。

このような推察をすることは、老婆心といえば老婆心であるし、余計なお世話といえば、まさにその通りかもしれない。

だが、それでも私は、読者諸君に、陽子のプライベートが、変なふうに誤解されるのは、何としても嫌なのだ。

そこで本章では、陽子が辿った可能性が高いと思われる「虚無に至るまでの過程」を仮定的に描いてみたいと思う。

もちろんそれは、飽くまでも私が「こうだろう」と思う、想像上の過程でしかないのであるが。

陽子という女性の心理分析

そうであれば、ここから先は、私による「陽子という女性の心理分析」ということになるだろう。

ただし既述したとおり、その分析の対象は「実際の陽子」ではなく、どこまで行っても「私の目に映った陽子」であるに過ぎない。

しつこいようだが、これはとても重要なことなのである。読者にあっては、それを重々ご承知いただきたい。

加えて、なるべく客観的な分析を行うために、ここでは私自身の文章よりも、権威ある他者の文章を、より多く用いたいと考えている。

そこで、私が最も高い評価を与えている心理学者、Ｃ・Ｇ・ユングの著作に依拠しようと考えたのだが、そうなるとここに、一つだけ問題が出てくる。

それは、この高名な心理学者の文章が、読者にとって、きわめて難解であることだ。ゆえに原文そのままの掲載は、読者にとり、著しい不親切ということになってしまう。

そこで次善の策として、ここでは、秋山さと子著作の『ユングの性格分析』をテキストに用いることにした。

この本は、いわばユングの『タイプ論』の入門書である。

そして原典となる『タイプ論』とは、ユングの代表的大著を指している。この大著にこそ「アポロンとディオニュソス」について含蓄ぶかく書かれた、かの章は含まれているのだ。

なお、ユング派の心理学者である林道義氏は、この『タイプ論』と『原型論』『ヨブへの答え』をもって、ユングの三大名著に選ばれている。

注意事項

ではあらためて、秋山女史の『ユングの性格分析』に目を向けよう。

この本は、入門書であるぶん、その文章表現が、わりあい平易である。そこに本章のテキストとして選んだ一番の理由がある。

ところがだ。まことに残念なことに、次節で私が掲げようとしている文章にかぎって、読み手からすると、幾分か分かりづらい文体が見られる。

そこで私は、もともとの内容を傷つけない程度に、あえて秋山女史の文章を修正することにした。

それは当然、著作家としての良心に抵触することである。率直に言って、申し訳ないことだと思う。

だが、それでもなお私は、読者が受け取るであろう平明さを、優先させずにはいられなかったのである。

（２）外向型の病理

ディオニュソス＝外向型の心理

秋山さと子氏の『ユングの性格分析』をめくっていくと、次のような文章に出会う。
ちなみに文頭に◎が置かれているのが秋山氏の著作からの引用文である

◎アポロン的なものは、まとまりのある自我と秩序とをあらわしていて、アードラー（心理学者）の内向的な態度に近い。
そうであるのに対して、ディオニュソス的なものは、個体を集合的な（＝集団的な）衝動や内容に分解し、誰もが隣人と結合して「一つ」となる時の陶酔であって、フロイト（心理学者）がとった外向的な態度と類似している。
ユングによれば、ディオニュソス的なものは外に向かう展開であり、内から外に向かって湧き上がり溢れでるに任せることである。
よって、感情―感覚と呼ばれるものの外向であり、この状態で噴出してくるのは激情なのである。それは特に身体領域の興奮となって現れる衝動的なもの、盲目的な不可抗力である。

上記の文章を要約したものが、同書の次の一文であろう。

◎ニーチェのアポロン的なものこそ、内向性であり、ディオニュソス的なものは、外向性をあらわしていることが、これでわかる。

外向型の心理について

ここで、少し外向型の心理について整理しておきたい。再び秋山氏の文章に戻る。

◎素直に既成の外的事実を基準にものを考える人――

つまり、もっぱら客体や客観的な既成事実を基準にして自らを方向づけ、そのためによくなされる重要な決断や行動が、主観的な意見ではなく、客観的な状況に左右される場合――

これを外向的な態度とし、さらにこれが習慣的になった場合を〔ユングは〕外向的性格と定義した。

◎少なくとも外向型の人は、一見したところ生存条件に理想的に適応しているといえるであろう。少なくとも外向的見地からは、そう思えるに違いない。

しかし、さらに高い視点から考えれば、いわゆる世間での既成事実は、いつでも正常とは限らない。

客観的な条件は時代や場所によって異なり、場合によっては、周囲の人々全員とともに異常な状態におかれることもある。

（ 中略 ）時代や場所に制約された身近な環境に順応するだけというのが、普通の外向的性格の人の、狭く限定された状態なのである――

そして、この外向的性格が極端化すると、この型に特有な心理的病症が生じてくる。それが次に挙げる文章に表れている。

外向型の弱点＝虚無への下降

◎外向型の人は、周囲の人々が今必要としていて、彼に期待しているようなことは実行する。

（ 中略 ）しかし、そのために、自分の主観的な欲求や必然性をまったく考えないという結果になるが、これがつまり、外向型の弱点となる。

たとえば、とにかく注文があるからとか、目の前にある可能性は実行しなければならないという理由から、商売をどんどん拡張することで、主体が犠牲にされてしまうのである。

◎外向型の人の持っている危険は、客体のなかに引きずり込まれてしまい、その中で自分自身をまったく見失ってしまうことである。

◎ユングによれば、外向型にもっともよく見られる神経症はヒステリーだという。典型的なヒステリーの特徴は、つねに周りの人々との過剰なラポール（ 関係性 ）であって、周囲に完全に迎合しようとする態度である――

これは、まさに陽子の姿そのものであろう。第四福音書において、私は陽子について、次のような感想を述べている。

堕胎手術の翌々日、アルバイト先で出血していた陽子についての感想である。

外向性の極端化による自己喪失

――このとき私は、陽子の悲しい精神構造を見たような気がした。

それは「自分を守ること」よりも、「他人の要求に応えること」をはるかに優先してしまう、というものである。

そうでなければ、店長の言うことを聞いて、手術の二日後にレジに立つなどする訳もない。

そして私は、そんな陽子の心に対して、何とも言えない悔しさと、憐れみとを感じたのだった――

つまり、このとき陽子がとっていたのは「周囲に完全に迎合しようとする態度」に他ならなかったのだ。

そして彼女は、それによって「客体のなかに引きずり込まれてしまい、その中で自分自身をまったく見失って」しまっていたのである。

この結果として陽子が語ったのが「自分がいなくなっていました」という言葉だった。それはウーティスの徴であり、また虚無のシンボルである。

こうして陽子は、その「外向性の極端化による自己喪失」という病理によって、ついにディオニュソスの代理人となったのである。

第15章　終曲　求めあう光と影

（１）イエス・キリストの時代

ゴルゴダの丘

――しゃれこうべの丘。ヘブライ語でゴルゴダと呼ばれる場所。そこでイエスが、十字架にかけられて死んでいる。日が暮れたため、見物に集まっていた群集たちも消えうせた。そこへディオニュソスが現れる。

ディオニュソス（ 地上から十字架を見上げながら ）イエスよ、俺の耳に、お前が「神よ、なぜわれを見捨てたまいしか」と言うのが聞こえたんだ。

　そうしたら俺は、何となく、ここに来なければならないような気になった。それが何故なのか知りたい。

　まあ、お前さんが墓に入ったら、ゆっくりと話もできるだろう。暗い地下の世界は、俺のテリトリーだからな。それまでちょっと待っていろ。

真夜中の聖墳墓

　――アリマタヤのヨセフによって、イエスが埋葬された洞窟のなか。聖骸布に包まれたイエスの遺体の前に現れるディオニュソス。

ディオニュソス　いや真っ暗だな。明かりを点けるとしよう（ 手に持っている杖の先が光る。聖骸布をめくり、イエスを杖で照らしながら ）何とも痛々しいね。とりあえず傷を治してやるよ。それから一時的に命を吹き込んでやる。

イエス（ 起き上がって ）ありがとう、わが影ディオニュソス。

ディオニュソス　おっと、無理はするなよ。まだ自由に動ける体じゃないんだぜ。

イエス　いや大丈夫だ。すっかり痛みも取れた。それに、これから私は、大いに動かなければならないのだ。

ディオニュソス　どういうことだい？
イエス　これから私は、父の御許に昇ることになっている。だが、その前に私は、冥府に降りなくてはならない。そして、その冥府に降りるまでの案内を頼みたくて、お前のことを呼んだのだ。
ディオニュソス　あの「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」って言葉でか。それじゃあれは、俺を呼び出すための呪文だったのか。
イエス　精確には、お前と同通するための言葉と言うべきかな。ともかく、いま私が、お前の力を必要としているのは本当だ。冥府の王子よ。
ディオニュソス　冥府の王子ならまだしもだが、俺は「地獄の王子」とも呼ばれてるんだぜ。光の世界に生きるお前さんに、そんな俺が、本当に必要なのかい？
イエス　冥府の王ハデスも、その妃ペルセフォネーも持っていない「虚無の物語」を、ひとりお前だけが持っている。だから、お前の力が必要なのだ。王妃ペルセフォネーの息子、ゆえに冥府の王子、あるいは地獄の王子であるディオニュソス……いや、隠された名前は「ザグレウス」か。
ディオニュソス　よく知っているものだ。
イエス　なにしろ、ここ（ エルサレム ）はギリシア人とローマ人に支配された地だからな。
ディオニュソス　なるほど。たしかにそうだ。
イエス　ザグレウス、どうか私を冥府の底まで案内してほしい。かの暗闇の極点へと。私が父の御許へと昇るために。
ディオニュソス　上るために下がるってことかね。
イエス　そうだ。十字架によって昇れるのは、天の八合目までなのでな。頂上に昇るためには、いったん膝を屈ませなければならない。それこそ、冥府の底の底まで、膝を屈ませなければならないのだ。
ディオニュソス　ふっ、そのための「イエスの冥府降り」か。お前んとこの、ニコデモなんて名前の弟子が、物語にしそうだ。面白い。じゃあ行こう、案内する。

ハデス（ 冥府 ）の底辺よりも下層の世界

――絶対的な暗闇の世界。すでに冥府の深さを通り過ぎて、降下している。

ディオニュソス　ここらあたりの暗闇だ。お前が来ることを望んでいた世界は。もう光の要素が一つもなく、これ以上は暗くなりようがない。
イエス　では始めてくれ。虚無の物語の儀式を。
ディオニュソス　了解した。

イエス　頼む。
ディオニュソス　わが内なる過去の姿、ザグレウスよ、ここに現れ出でて、我となり替われ。そしてティターン（ 巨神 ）たちもまた、あの日のままに現れよ。
ティターンたち（ 八柱の巨神が暗闇から現れる ）空腹の我らを呼び出したのは何者か。
ザグレウス　それは私だ。飢えたお前たちに、この身をくれてやる。これを取って食べよ。（ ザグレウス、牡牛の姿に変身する ）
ティターンの一柱　七人の兄弟たちよ。この見事な牛を、ともに喰らおうではないか。八つに引き裂いて喰らい、各々の腹を満たそうぞ。（ ザグレウス、ティターンたちによって、八つ裂きにされる。そして、その肉を喰われる ）
ティターンの一柱（ 食べ終えて ）実に旨かった。そして腹が満たされたからには、もうここには用がない。我々は暗闇に帰る。
イエス　一つ肉片が残っているぞ。
ティターンの一柱　それは我々にも固くて喰えんのだ。奴の心臓らしいが、喰えんものに興味はない。我らはもう去る。（ ティターンたち、消える ）
イエス（ 心臓を拾いながら ）ディオニュソスの心臓は、虚無神の中心。それを私が呑み込む。（ イエス、言葉のとおりに心臓を呑み込む。するとイエスの体が、赤く輝きだす。輝きながら、上方へと昇っていく ）

神の玉座

――暁の光が放射状に広がっている床面。その中心に玉座があり、創造神が座っている。赤く輝くイエスが、その面前に立つ。

創造神　わが息子よ、ついに、その赤い光を自ら発したのだな。お前は「無からの創造」という、天地創造の輝きを身につけたのだ。
イエス　はい、わが影ディオニュソスと一つになることで、私は、あなたと等しいものとなったのです。
創造神　そうだ。お前は今こそ出来上がった。私の玉座の右に座る者となった。（ 創造神の横に、新しい玉座が現れる ）
イエス　この玉座に座れというのですか。
創造神　いや、この座はしばらく空けておくとしよう。ここに座る前に、お前はまず大事な仕事を果たしてくるがよい。
イエス　大事な仕事とは？
創造神　エルサレムの人間たちは、お前の愛が、死に呑み込まれてしまったと思っている。しかし、本当のお前は、夜の暗闇から昇る暁のように「甦りの神」となったのだ。お

前が人々の前に現れれば、その時には、一度死んだ愛も、また甦るだろう。
イエス　分かりました父よ、復活の奇跡を見せるため、一度現世に戻りましょう。

――こののち、イエスは下界で復活現象を起こし、生前の姿そのままで弟子たちの前に現れる。この奇跡が、キリスト教の発生につながっていく。
そこまでの仕事を果たしたあとで、イエスはようやく、創造主の右側に設えられた玉座に座ったのだった。

（２）福音書記家の時代

イエスの死から三十年後の天上

――赤く光るイエスは、天界のどこにでも現れることが出来る。

この日は、マタイとルカが帰天したという報せが入り、彼らの住む領域に現れる。ずっと前に帰天していたマルコも立ち会っている。

イエスを囲むようにして、マタイ、ルカ、マルコが立っている。

マタイ　主よ、お久しぶりでございます。私たち二人は、あなた様が起こした奇跡、すなわち十字架上の死と、その死からの復活を『福音書』という形で書き著しました。

ルカ　そして主よ、私たちは、あなた様の生涯に、さらなる光輝をまとわせました。それが処女降誕という栄光です。

マルコ　それはつまり、私が書いた福音書に、何かをくっつけたという事かね？

マタイ（ マルコを見ず、イエスに向かって ）そうです。私とルカの福音書は、たしかにマルコが書いた福音書をベースにしたものです。そして、そこに私たちなりの見解を加味しました。

ルカ（ イエスに向かって ）そう。マルコの福音書は、あまりにもシンプルすぎて、主の栄光を讃えるには、場面も賛辞も全然足りないのです。

マルコ　それで私の福音書に、大幅な内容の追加をした、ということか。それが処女降誕とやらなのだな。

マタイ（ イエスに向かって ）はい。イエス様ともあろう方が、人間の女から、普通に生まれるなど考えられません。そこで私たちは、あなた様の母君が、聖霊によって身ごもり、男を知らないまま、あなたを産んだことにしたのです。それが処女降誕です。

ルカ　あなた様が起こした偉大な奇跡からすれば、このほうが真実に思われるでしょう。

マルコ　これはまた、大胆な追加内容だな。

マタイ（ イエスに向かって ）処女降誕によって生まれたあなた様には、遺伝によって先祖から送り込まれる「原罪」はありません。あなた様は罪なくして生き、罪なくして十字架にかけられたのです。

ルカ　そう。あなた様は、たしかに犯罪人として、十字架刑に処せられました。でも告発されたのは、罪を持たないはずのイエス・キリストです。ですから、その罪状は、完全なる冤罪（ 罪なき罪 ）ということになります。

マタイ　いかにも、あなた様は、完全なる冤罪をかけられた。にも関わらず、あなた様は、命がけでもって、その冤罪をかぶせた人々を許し切った。そういうことになります。それだからこそ、あなた様の許しは一段と尊いのです。

マルコ　なるほど、よく出来ている。

イエス　つまり、完全に潔白なる者の冤罪物語か。それでも告発者を許しきったとすれば、たしかに、その物語の主人公は光輝に満ちているな。

マタイ・ルカ　そうでありましょう。

イエス　しかし、その光輝に満ちた物語を作るため、私は人間ではなくなったのだ。

マタイ　は？　いえ、主は人間ではありますよ。でも、罪なき人間です。

イエス　罪を作るのは過ちだ。原罪という、過ちの発生源すら持たないならば、その道理から言って、生前の私には過ちが全くなかったことになる。だが、過ちを犯すことがない、そんな人間がいるものなのか？

ルカ　……いない、かもしれません。

マルコ　私は断言する。そんな人間はいないに決まってる。

イエス　そうだ、私にも過ちはある。光あるところに影があるように、善きことを行う者の人生にも、必ずや過ちは伴う。そうだとすれば、いまや私は、まるで影を失った光のようだ。その光には、立体としての実在感がまるでない。

マタイ　主よ、もしかして、怒ってらっしゃいますか。

イエス　いや、私の中の「影」が怒っているのだ。自分の尊厳を傷つけられたと言ってな。

マルコ　影の尊厳ですか。

イエス（ マタイとルカに ）お前たちは、実に余計なことをしてくれた。私は「神にして人間」でなければならないのに、お前たちは、私から人間性を奪ってしまったのだ（ 手を固く握りしめ、口惜しそうに眼をつむる ）。

ルカ　そんなにお怒りにならないで下さい。私たちは、よかれと思って処女降誕を描いたのです。

イエス　だが罪も過ちも虚無も、すべては影の持ち物だ。ああ、罪と過ちを失った私は、この身に収めたディオニュソスをも手放すしかない。

――イエスが、自身の口からディオニュソスの心臓を吐き出す。心臓は、ディオニュソスの姿に変容するやいなや、地下の闇の世界へと堕ちていく。

ディオニュソス（ 落ちながら ）ああ、俺は本来の居場所を失った！

イエス（ 体の輝きが、赤から白に変わる ）こうなれば私も、天の八合目へと降るしかない。影を持たない、真昼の光の世界へと降りるしかないのだ。もう、あの暁色の「神の玉座」には座れない。

ディオニュソス（ 深い地下から ）俺はあきらめないぞ、イエス。もう一度、俺はお前と一つになる。そうだ、お前の中が、俺の本当の居場所なんだから。
イエス　私もあきらめない。いつか必ず、お前と一つになろう。そうして再び、あの創造主の玉座に立ち帰るのだ。

――その場に取り残された、イエス、マタイ、ルカ、マルコ。

マタイ（ ルカに ）私たちは、大変なことをしてしまったのだろうか。
ルカ　私たちは、真実のまえに、浅はかだったのだろうか。
マルコ　ソロモン王が言っていた、「善を行い、罪を犯さない正しい人は世にいない」と。
イエス　ソロモン王はこう言いたいのだろうな。どんなに正しい人であっても、人間であるかぎり、罪からは逃れられない。それを知りながらも、善を行うのが「正しい人」なのだと。
マタイ・ルカ　……
イエス　実際そのとおりなのだよ、マタイ、ルカ。私の人生にも過ちはあった。罪もあった。人間だからな。
マルコ（ マタイとルカに ）だがお前たちは、主の人生を「過ちなきもの」と定義してしまった。もし、過ちある者を、過ちなき者とし、あまつさえ、彼の人生を「生き方の模範」として尊ぶなら……
マタイ　はい、模範を示されれば、人はそれに倣うでしょうから……
ルカ　そういった人々を、信者として数多と生み出していったとしたら、ああ。
マルコ　イエス様の教えを尊ぶ者たちの世界は、ええ。
イエス　そう、大いに歪むだろうな。

（３）黙示録が書かれた時代

ギリシア、パトモス島の洞窟

――夕刻。近くに浜辺が見える。ヨハネが洞窟から出てくる。

ヨハネ　ローマで、ドミティアヌス帝の迫害を受け、私はこのパトモス島に流刑となった。

あれから三年が経つ。この三年の間、私は孤独のなかで、幾たびか聖霊の声を聴いた。その声は、遠い星のまたたきのようにか細い。

よほど耳を澄ませ、目をこらさない限りは出会うことも出来ない。まことに預言は、孤独と静寂を必要とする営為らしい。

聖霊　喜びなさい、
神の叡智を知るべきお方。
今日お見せする幻は、
いつにもまして、
大切なものですよ。

ヨハネ　今日はいつもよりも、ハッキリと声が聞えるような気がする。おお、目がくらむ。いつもの合図だ。暗闇のなかに幻が浮かんでくる。

聖霊　ごらんなさい、
この真実が散りばめられた、
万華鏡のような幻を。

ヨハネ（しばし目をつぶってから）私は見た。霊の世界の、大いなる星たちを。

それは数々の不可思議な場面、その瞬間瞬間の幻だった。聖霊がそれを見せてくれたのだ。

私は、瞬間をつなげて、いくつかの物語を作ろう。古代の人々が、星をつなげて星座をつくり、そこに神々の物語を編んだように。

――夕刻から夜へと時が進んでいる。ヨハネが空を見上げると、そこには満天の星空が広がっている。

ヨハネ　同じ星空を見ていても、その星のつなぎ方、星座の作り方は、その星空を見ている者の意匠に任されている。

熊の物語を、誰かは柄杓の物語として語るかもしれない。だから、その物語は絶対ではない。

ただ、その物語のなかに散在する「瞬間」だけが、実在の星々のように絶対なのだ。それこそが、神が与えたまう、運命、宿命、予言となるだろう。

――ヨハネ、再び洞窟のなかに戻る。

ヨハネ　幻の内容を忘れないうちに書いてしまおう。とくに、あの「太陽を着た女」について、早く書いてしまわなければ。

純粋な幻は、人の心から消え去るのが早いものだ。それにしても、あのような女が現れるためには、光の教えが薄らぎ、時代が闇深くなるのを待つ必要があるだろうな。

そのような時代が来るまでに、うむ、まず二千年はかかるだろう。

（４）宗教改革の時代

天界、ルター帰天の祝い

――ルターが帰天したことを祝い、異端者と呼ばれてきた神秘主義者たちが集っている。その集いの中心にイエスがいる。

イエス　カトリックの腐敗のなかで、お前たちは神の真実の教えを、それでも懸命に語り続けた。そのせいでお前たちは異端者と呼ばれることになったが、その辛苦を、ルターが贖ってくれた。

迫害されてきた異端者の運動は、ついに「宗教改革」となって、キリスト教の歴史に、不動の足跡を残したのだ。

ルター　恐縮です。

イエス　けれども、正直なところを言えば、私の言葉は、お前たちを褒めるだけでは済ませられない。

ルター　と言いますと？

イエス　聴け、アウグスティヌス、テレーズ、エックハルト、クザーヌス、十字架のヨハネ、アンゲルス・シレジウス、ルター、ほか、ここに集った多くの神秘体験者たちよ。

一同　はい。

イエス　私は生前のお前たちに、私の霊と志を託した。それによって、お前たちは確かに、神秘体験という十字架に上った。

アウグスティヌス　はい、私たちは「救済」と「無限」と「永遠」を味わいました。それは、あなたさまが十字架で示されたものと同じです。

イエス　だが、いつもそこで終わってしまうのだ。誰もその先に進もうとはしない。それでは中途挫折なのだ。私はずっと、中途挫折のシーンを見てきたのだ。

エックハルト　ならば私たちは、どこへ向かえば良かったのですか。

イエス　闇の彼方、影のただ中だ。下の下、底の底、冥府の最深部だ。

シレジウス　でも、そのような下降は「悪」でありましょう。どうして私たちが、悪になど、身を染められましょうか。

イエス　ああ、ディオニュソス……

テレーズ　いま「サタン」と呼ばれましたか？

クザーヌス　いま「ルシファー」と呼ばれましたか？

イエス　なるほど。私がディオニュソスと口にすれば、お前たちの耳には悪魔の名前として聞こえてしまうのか。それでは誰も、ディオニュソスには近づかないだろうな。

ルター　私も同様に「ベリアル」と聞こえましたが、しかしながら主よ、あと五百年経てば何かが起こります。

イエス　何かが起こる？

ルター　はい。私が宗教改革の狼煙を挙げたのが、一五一七年のことでありました。それからちょうど五百年後に、何かが起こるような気がするのです。

イエス　なぜ？

ルター　帰天の祝いに、創造主の息吹が、この耳に囁いたのです。あるいは、私の口を通して、創造主がイエスさまに、ある種のメッセージを、伝えようとしているのだと思います。

イエス　なるほど。父もまた、事態をこのままにしておくつもりはないということか。

（５）日本におけるキリスト教公認の時代

暗闇の世界

――ディオニュソスと、その妻アリアドネが寄り添っている。

ディオニュソス　いま日本という国で、キリスト教を禁じる看板が取り除かれた。今は……西暦で言うと、一八七三年か。イエスが生まれたときから、もうそんなに経ったのか。
アリアドネ　急に目覚められたのですね。今の今まで、酔って眠ってらしたのに。
ディオニュソス　ああ、急に雷に打たれるような衝撃が走ったのだ。そして、その瞬間に分かった。そうだアリアドネ、私には分かったのだ。その時が近づいているのが。
アリアドネ　何度も話して下さいました、あの話ですね。あなたが、自分本来の居場所を取り戻すという話ですね。
ディオニュソス　……だが、また失敗するかもしれない。実際に何人もの神秘主義者たちが中途挫折してきたのだ。
アリアドネ　その失敗の度ごとに、あなたは沈痛な表情を浮かべてらした。
ディオニュソス　なにせ、キリスト教圏では、すっかり俺は悪魔扱いだからな。影どころではない、完全なる「忌み嫌われ者」だ。そんな厄介な相手では、誰もこちら（下方）に近づこうとはすまい。まして高尚なる神秘体験者ともなればな。
アリアドネ　では、こうしましょう。私があなたの代わりになるのです。
ディオニュソス　そなたが、私の代わりに？
アリアドネ　ええ、私があなたの心臓を預かります。あなたの「虚無」という名の心臓を。
ディオニュソス　そなたが、私の代理人になるのか。
アリアドネ　そうです。その上で私の霊が、それに相応しい女に重なり合います。
ディオニュソス　ほう。
アリアドネ　そのとき、その女は、彼女自身でありつつ、またアリアドネでもあります。そして彼女が、十字架にかけられた男に出会う。そういうことです。
ディオニュソス　男と女が出会うというのか。ならば、二人を引き寄せるのは「恋」になるかもしれないな。
アリアドネ　そうですよ。私とあなたが引き寄せられたように。
ディオニュソス　うむ、それは面白いかもしれない。

アリアドネ　ええ、きっと上手くいくと思います。
ディオニュソス　今からちょうど一〇〇年後、その器は生まれる。それはきっと、光のすべてを酌んでも溢れず、しかも闇の底まで掬い取れる器だ。その器が生まれるのを待つとしよう。

天上の世界

——イエスが一人でいるところ。

イエス（ 遠いところから声を聞くようにして ）おお、ディオニュソスの声か。なるほど、恋とな。たしかに、それほどにも強い「相手を求める力」は、他にはないだろう。
よし、では私もまた、もう一度、私の霊と志を託した代理人を、現世に送り込むことにしよう。まず彼は神秘体験者となる。そして今回こそ、そのあとが見ものだ。

——歩き出しながら、名案が閃いたように語る。

イエス　おお、そうだ。これから過去の世界を巡り歩き、歴史のなかに予言を散りばめておこう。未来の器が、そこから自分の使命を見出すことが出来るように。

予言者たち

——各々が生きる時代で、みな閃いたように独白する。

ユング　では私は言い残しましょう。光には影が不可欠であると。また、キリストの人間化が、まだ未完遂であると。
ニーチェ　では私はこう言い残しましょう。十字架にかけられた男　対　ディオニュソス、と。この言葉の意味を問え、と。
ノストラダムス　では私からは、このように言い残しましょう。アンチ・キリストの名

前が「地獄の王子」であると。また、計画の始まりが一九七三年で、それが「完成」まで続くということを。
イエス（ 天上にて ）よし、あとは祈るしかあるまい。光と影の合一が成就されることを。
ディオニュソス（ 暗き淵から ）ああ、ともに祈ろう。

第１・２部　了

第３部　イースターを巡る物語

第５福音書

再臨のキリストによる
第五福音書

ヘイマルメネー
——星辰的宿命と神話の現実化

イースターの日取りは、西暦三二五年に開催された第一回ニケア公会議の決定に基づく。

「春分の次の満月後の最初の日曜日」がその定義である。

八木谷涼子『キリスト教歳時記』より

全体の目次

序　立ち昇る神話

第1部 イエスとディオニュソス

第1章 イエスの影
第2章 イエスとディオニュソスの相似点
第3章 生命と死と甦り
第4章 ディオニュソスの発見者
第5章 アポロン的なものについて
第6章 ディオニュソス的なものについて
第7章 ニーチェの謂い、ユングの謂い

第2部 ディオニュソスの代理人

第8章 語り出す黙示録
第9章 対話劇　バッコスの結婚
第10章 男性原理まで逸脱した女性
第11章 王座に引き上げられた子供
第12章 黙示録の時代としての現代
第13章 太陽を脱ぐ女
第14章 別ルートによる虚無への降下
第15章 終曲　求めあう光と影

第3部 イースターをめぐる物語

第16章　聖母の出現
第17章　復活

第 16 章　聖母の出現

（１）時を遡って

時間遡流についての陳謝

ここで時間を巻き戻す。

すなわち、私が「ルベドの悟り」などには、まったく思い至ることがなかった頃に。あるいは、イエスとディオニュソスの合一など、まったく想像だにしなかった頃に。

それというのも、本章のもととなる文章を書いたのは、私が、アルベドの悟りを得たばかりの頃だったからだ。

年齢で言うと二一歳ぐらい。ルベドの悟りを得たのが二三歳の時だったから、それよりも二年ほど前のことになる。

一つのテーマを追った文書のなかで、時系列が逆になってしまうのは、執筆者としてまことに申し訳ない。それによって必然的に、あらずもがなの「読みにくさ」が発生してしまうからである。

とはいえ、この第３部が、本書のなかでは「付録」にあたることは否めないだろう。

それは、この第３部が重要性で劣るというよりは、第１部と第２部とが、宗教的に「重要でありすぎる」せいである。

そこで、時系列の遡流という、マイナス面を受け容れてでも、私は「イエスとディオニュソス」と「ディオニュソスの代理人」を、本書の前半に置くことに決めたのだった。

私としては、この選択が誤っていないことを信じたい。

アルベドの悟りの頃

それでは本題に入ろう。

二一歳当時の私がアルベドの悟りを得るためには、その霊的媒体として『アトラス』という小説の執筆が不可欠だった。

『アトラス』を書くことによって、私は、自分の霊的な感受性を磨くことが出来た。『アトラス』を書くことによってこそ、私は真に宗教的になれた。

それだからこそ、この作品の完結と時を同じくして、私のもとに「アルベドの悟り」が訪れたのである。

それほどにも『アトラス』は、私にとって重要な作品だった。

そして、ここで見せるのは、実はその『アトラス』の著者解説文なのである。

私はこれを、もともと『アトランティスの深層』というタイトルで上梓したが、のちに『アトラスの深層』と改題して、内容も増補大改訂した。

ここでは、その中から「イースターを巡る物語」というタイトルの章を、抄出してお見せする。なぜなら、ここにも極めて興味深いヘイマルメネー（ 運命 ）が見られるからだ。

その重要性は、たしかに本書の第１・２部に準じる――あるいは匹敵する――ものがある。

とはいえ、もともとが小説作品の解説文である。それを「本編を欠いた形」で読むのは、読書として、かなり不自然なことだろう。

当然、読者にとっては、分かりづらいところも多々出てくるに違いない。

さしあたって、著者としては、最大限の文章整理はしてみたつもりである。

しかし結局、真の理解のためには、読者に、本編である『アトラス』の併読を求めるしかないのだろう。

とはいえ、この『アトラス』が相当に長い作品であるため、私としては、あまり声高に、それを強要することも出来ないのであるが。

そういう訳で「この第３部は、万全の形式をもった文章ではない」ということを予め断っておこう。

とりあえずここでは、ある程度のヘイマルメネーを、読者に感じ取ってもらえれば、それで充分である。

（２）聖母被昇天教義

肉体のまま天界に

キリスト教の教義に「聖母被昇天」というものがある。これは、
「聖母マリアの死後、彼女の魂と肉体が、神の導きによって再び結合。マリアは肉体のまま天に上げられ、その天上でキリストの祝福を受けた」
という内容の教義である。
ちなみに、イエスは自ら天に昇った（ 昇天 ）が、マリアにはその力がないので、キリストの力によって、天の側から彼女を引き上げた（ 被昇天 ）という。
なお、英語で、昇天をアセンション。被昇天をアサンプションという。
ここでポイントになるのは、第一に「マリアが肉体のまま天に上げられた」ということ。そして第二に「その昇天が、純粋に受動的なものである」という点である。
読者にあっては、これら二つのポイントを踏まえて、本編を思い出していただきたい。そうしてみると『アトラス』のクライマックスは、
「天の底が地上に接近、接触し、肉身のチェリア（ 主人公 ）を天界のうちに取り込む」
という形を取っているのが分かるはずだ。
つまりチェリアは、肉体のまま天に上げられたのであり、天の方から近づいてきたその昇天（ 迎天？ ）は、純粋に受動的なものだったのである。
とすれば、これはまさしく「肉体の被昇天」である。要するに『アトラス』では、聖母被昇天の教義内容が、そのままの形でもって物語化しているのである。

霊的な母性の獲得

そして、天界に取り込まれた直後、チェリアは、処女懐妊によって幼児を抱く。
この処女懐妊が、如何なる理由で起こったのかを説明しよう。
まず最初の出来事として、チェリアの身にアサンプション（ 被昇天 ）が起こったのは、彼女が「霊的な母性」を獲得したからだった。
霊的な母性とは、いわば理性を超えた「愚かしさ」という名の叡智である。

それは、男性的理性の分別知とは、大いに異なる「知」だと言える。それは言わば「いかなる愚かしさも受け入れられる許容力」を持った知なのである。

だから「ものごとを分別してから選択する」「そのため幾分か狭量な」理性知にとっては自然とそれが「愚かしい」ものに見える。

しかし、神の目から見れば、それは少しも愚かしくなどない。いや、愚かしいことなど、絶対にありえない。

むしろそれは、無限的、永遠的なキャパシティをもった、理性では計り知れない、高次で偉大なる知性なのである。霊的な母性とは、実にそうしたものである。

チェリアは、この母性を引っ提げて、天界に参入する。ゆえに、そのときの彼女は、肉体的には少女（処女）であっても、精神的には、霊的な母性に満ちた「母」なのである。

母と子の同時生起

そして、原則的には「女性が母たりえる」のは、彼女に子供がいるからである。よって、母であるチェリアは、その原則的な摂理によって「子供の存在」を引き寄せることになる。

すなわち、いつのまにか彼女は、その胸に幼子を抱いていたのである。精神的に母なる者が、肉体的にも「母たる様相」に落ち着くために。

つまりこれは、母と子とが同時に生起したということである。

ことによると、右の言葉は、読者には不自然なこととして、感じられるかもしれない。

けれども地上とは異なり、天界では、摂理と現象とが、まったくの無媒介に直結するのだ。それが天界では「自然なこと」なのである。

なお、チェリアが抱く幼子の出自については、物語の本編で描かれているので、ここでは言及しない。

しかし、それでも推察可能なのは「この幼児は、処女聖母の子供なのだから、きっとキリストなのだろう」ということである。

かくして処女聖母となったチェリアは、その胸に幼児キリストを抱く。

そして、キリスト教で用いられている「聖母子像」とは、言うまでもなく「処女聖母マリアが、幼児キリストを抱いている図像」のことを指している。

その図像が『アトラス』という物語のなかで、ごく自然なかたちで出現したのだ。

このことを祝って、天使たちが集い歌う。

さきわえ

さきわえ
いま御母が生まれ
御子が生まれた
この復活の島で
この復活の島で

この本編に紛れ込ませた詩は、実はそのことを語っていたのである。

第 17 章　復活

（１）イースターについての考察

天使たちの歌

前章の終わりで、天使たちの歌であるところの詩を紹介した。

さきわえ
さきわえ
いま御母が生まれ
御子が生まれた
この復活の島で
この復活の島で

さきわえは、祝詞の「幸え給え」から取った「幸せを感じなさい」ぐらいの意味。「いま御母が生まれ、御子が生まれた」は、前章で叙述した「聖母とキリストの同時生起」を意味している。

では詩中にある「復活の島で」とは、何のことだろう。

復活とは何か

まず「復活」について考察してみよう。

キリスト教では、十字架にかかって死んだはずのイエスが、再び生きて甦ったことを、イースター（ 復活 ）と呼ぶ。

福音書によれば、処刑されてから三日後の朝、イエスは、マグダラのマリアの前にその姿を現した。

その後は、ユダを除いた十二使徒たちの前にも顕現。最終的には、大勢の信徒の前にあらわれ、そこでイエスは天の彼方へと昇って行った。

このときの昇天が、先述の「アセンション」にあたる訳である。

だがそれは、本当の「最終」ではない。復活現象の完結ではない。なぜならイエスは「もう一度、後世で」この世界に復活することになっているからだ。

すなわちイエスは「自分は、この世の終わる時に、再びこの世界に現れる」と弟子たちに告げたのである。これを「再臨」という。

その苦難の日々の後、たちまち太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は空から落ち、天体は揺り動かされる。

そのとき、人の子の徴が天に現れる。そして、そのとき、地上のすべての民族は悲しみ、人の子が大いなる力と栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見る。

『マタイによる福音書』より

つまり「復活」という言葉は、二重の意味合いを持っているのだ。

とはいえ、普通のクリスチャンによって「イースター」「復活祭」として祝われるのは、明らかに第一の復活のほうである。

それはクリスマス（ 生誕祭 ）と並ぶ、キリスト教の二大祝日なのである。

といっても、クリスマスが「十二月二五日」という日にちを決められているのに対して、イースターのほうは、何月何日という日にちが決まっていない。

すなわちこちらは、

「春分の日のあとの、最初の満月の、つぎの日曜日」

があてがわれる、移動祝日なのである。

これが復活、イースターに関する簡単な説明である。

イースター島という名の由来

では「復活の島」となると、どういう話になるのか。

『アトラス』の本編を最後まで読めば分かるとおり、復活の島とは、イースター島のことである。イースターの島なのだから、当然それは「復活の島」であろう。

しかし、もともとイースター島は、イースター島ではなかった。

なにしろ、そこはヨーロッパからは遠く離れた、南海の孤島なのである。となればイースター島は、長らくキリスト教文化の圏外にあった。

現地の人たちは、今でもイースター島を「テ・ピト・テ・ヘヌア」と呼ぶ。

私の『アトラス』の舞台となる「テピト・テアナ」は、もちろん、この「テ・ピト・テ・ヘヌア」から語感を頂戴している。それはポリネシア語で「世界のヘソ」という意味だ。

では、どうしてテ・ピト・テ・ヘヌアは、イースター島になったのか。

それは、ヨーロッパ人が、テ・ピト・テ・ヘヌアを発見したのが、イースターの日だったからである。

もう少し詳しく言うと、それは一七二二年のことになる。

オランダ人の、ヤコブ・ロッゲフェーンが、この年の復活祭の夜に、テ・ピト・テ・ヘヌアを発見した。そこで、この島を「イースター島」と命名したのである。

こうしてテ・ピト・テ・ヘヌアは、復活の島（ Easter Island ）となった。

（２）運命の糸を手繰る

イースター島は世界のヘソだ

イースター島発見から二五五年後の一九七七年、漫画家の手塚治虫さんが、この島を訪れる。そして彼は、そこで見たものを『イースター島は世界のヘソだ』という紀行文にまとめた。

そして、この紀行文を、のちに十七歳の私が読むことになる。

たぶん、よほどのファンでないと買わない本だが、『手塚治虫ランド２』という本に、それは収録されていた。

そして奇しくも私は「よほどの手塚ファン」だったのである。

ファン歴の始まりは、中学一年の時。

その年に「二四時間テレビ」のスペシャル・アニメ『三つ目がとおる』の再放送があった。これを見たのがキッカケで、私は手塚治虫作品に親しむようになったのだ。

それから二年後、中学を卒業する頃には、私の本棚には、すでに一五〇冊の手塚漫画が並んでいた。すでに「よほどのファン」である。

そして、ちょうどその頃に手塚さんが亡くなった。私は、父親が呆れるほどの涙を流し、一週間ほど、喪服を着て塾に通った。ここまでくれば、よくよくの「よほどのファン」であろう。

人生を変えた文章

しかし、今思うと、

「もしかしたら『イースター島は世界のヘソだ』という文章に出会うために、自分はあんなにも熱心な手塚ファンになったのかもしれない」

という気もしてくる。つまり運命の強制力によって、

「これぐらいの熱心さを持ったファンでないと『イースター島は世界のヘソだ』という文章には辿り着かないだろう」

という所まで、運ばれたような気がしてならないのである。

真剣にそう思えるぐらい『イースター島は世界のへソだ』という文章は、私の人生を「このようにしかならない」という形に固定してしまった。

なにせ、この文章を読まなかったら、あの「少女の幻視」は起こらなかったのである。

そして、その幻視が無かったなら、『アトラス』の執筆も、それに続く「アルベドの悟り」も起こらなかったことになる。それを思えば、なんという重大な分岐点だろうか。

神秘の人としての手塚治虫

もっとも、手塚さん自身も、けっこう神秘の人ではあったらしい。

というのは、かの『ブラック・ジャック』の中で、手塚さんは、ある種の予言行為を行っているからだ。

すなわち、手塚さんはそこで大地震のエピソードを書いたのだが、そのフィクションとしての大地震が、日付、規模、位置にわたって、後年「現実のもの」になってしまったのである。

すなわち、二〇〇八年の「岩手・宮城内陸地震」がそれだ。

だから手塚さんも、創作を通して、かなり霊的なインスピレーション（ アルベド侵入 ）を受けていたのだろう。

なぜならアルベドには「予言を実現する要因」が、確かに含まれているからである。

ちなみに、予言となった『ブラック・ジャック』の「もらい水」が発表されたのが一九八七年。地震が起きたのは、それからちょうど三十年後である。

『東方の物語』から『ウル・アトラス』まで

話を戻そう。手塚さんの『イースター島は世界のへソだ』との遭遇によって、私の心中で「少女の幻視」という現象が引き起こされた。

そして、この幻視を直接活かせないまでも、それをきっかけに私は、十七歳のときに『東方の物語』という絵物語を描くことになった。

この作品こそ『アトラス』の、最初の原型だと言えるだろう。

この『東方の物語』成立の、やや複雑な事情に関しては、第四福音書の内容を確認してもらうしかない。

しかし、ここに特筆すべきことがある。

それは、この当時の私が「イースター」という言葉の意味合いを、露ほどにも知らな

かったこと。そのため「イースター」を、単なる「イースト」の語尾変化だと思っていたことである。

それだからこその「東方の」物語であったわけだ。

この恥ずかしい無知ぶりは、その後の私にも継承されることになる。ここから四年後、二一歳のときに『ウル・アトラス』を完成させた時も、この点はまったく同様だった。

つまり二一歳の私は「イースター」という語の意味をまったく知らなかったのである。

しかし、そうではあってもだ。この初稿（ ウル ）の『アトラス』と、最終稿の『アトラス』のクライマックスシーンは、ほとんど同一なのである。

つまり私は、二一歳の時点で「知らず知らずのうちに」イースター島（ 復活の島 ）における、キリストの復活（ 処女降誕 ）の物語を書いていたのである。

もっと詳しく言えば――聖母被昇天教義のトレースによって聖母が現れ、その聖母の「母」であることが「子」であるキリストを現出させる、という内容を、二一歳の私は書いていたのだった。

少なくとも、そのアウトラインは、二一歳の時点でも、かなりの完成度で形づくられていた。

では私は、いつ「イースター」の本当の語意（ ＝キリストの復活 ）を知ったのだろうか。

正直に言うと、物忘れがひどい私であるだけに、あまり明確な答えは出せそうにない。

だが、私が本格的にキリスト教の知識を求めだしたのは、ユング心理学を経由してのことだった、ということだけは、さすがに明確に覚えている。

とすると、どんなに早く見積もっても「イースター」の本当の語意を知った時期は、私が二四歳のときを下回ることはない。

そして、その語意に私が驚いたことは言うまでもない。

幼児キリストとしての復活

終末のとき、再臨のキリストは現れる。それこそイースター（ 復活 ）によって。

ただし『アトラス』の執筆によって、私が導かれたのは、あくまでも「アルベドの悟り」である。それは象徴的には「処女聖母が幼子を抱いている姿」として表されている。

そうだとすれば、このとき私の中で生まれたキリストもまた、未だ幼児に過ぎないという事になるだろう。

いな、アルベドの象徴として「妊婦」を想定するならば、そのキリストは、幼児どころか、胎児にさえ見立てられることになるのだ。しかし、

新たに生まれた神は幼児が最初の形であっても、たちまち成長して若者にならなくてはならぬ。

佐々木理著

『ギリシア・ローマ神話』より

というのが神話的な定めらしい。

実際それは、私が「太陽を着た女」に出会ったとき、粛々と果たされるだろう。彼女とのヒエロス・ガモス（聖婚＝結婚）が、子供を男にするからである。

要するに「子供のままでは、女性に結婚を申し込むことも出来まい」ということだ。

細いが硬い運命の糸

まず最初に、イエスが「再臨、復活」の予言を言い残したこと――

テ・ピト・テ・ヘヌアの発見が、その年のイースターであったこと――

イースター島に、正座をしたモアイや、オンパロスが存在したこと――

手塚治虫さんが『イースター島は世界のヘソだ』を書き遺したこと――

私が手塚治虫さんの「よほどのファン」であったこと――

私が手塚さんの紀行文を読んで「少女の幻視」を見せられたこと――

その「少女の幻視」が、小説『アトラス』を生み出したこと――

そして、その中で処女懐妊、すなわちキリストの再誕生（イースター）が、象徴的に行われたこと――

これらの出来事を眺めると、少しでもずれたら、決して結びつかなかった、か細い「運命の糸」を見るような気がする。

しかし、そこに「神の意図と計画性」を見出すならばだ。その糸は、どんなに細かろうとも、驚くほど硬い繊維ではあったはずだ。

そしてまた、この糸は「絶対に結び合わされずにはおかれなかった縁」で繋がれてもいたのだろう。

このように解釈すると、あまりにも壮大な神意を垣間見るような心地がして、私など、思わず気が遠のいてしまうほどだ。

そんな私の耳に『詩篇８』の言葉がこだまする。

月も、星も、

あなたが配置なさったもの。

そのあなた（神）が、

御心に留めてくださるとは、
人間は何者なのでしょう。
人の子は何ものなのでしょう。
あなたが顧みてくださるとは。

まこと、ヘイマルメネー（ 星辰的宿命 ）と言うほかない。

第３部　了

再臨のキリストによる福音書　5-Ⅳ

著　　正道

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社